

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①国語の伝え合う力を基盤として、横断的に教科等と関連化を図れるよう柔軟で実践的なカリキュラムを編成する。(モジュール学習の活用・言語活動の充実) ②教科等で身に着けた知識や技能を活用できるよう、学校や地域で様々な交流活動を体験的・効果的に積み重ねる機会を設ける。(実践力、豊かなコミュニケーション能力の育成)	①重点研では、対話を通して協働的な活動を行い、コミュニケーション能力の育成をした。 ②コロナ禍ではあるが、生活科や総合的な学習の時間などで地域との交流が増えてきている。ひまわり発表会では、保護者や校内の児童との交流を3年ぶりに実現することができたことは、児童の学びを深める機会となった。	B
豊かな心	①全ての教育活動において互いの良さを認め合い、違いを尊重しながら問題を解決したり、新しいものを創造したりする体験を積み重ねる。(地域や中学校と連携したあいさつ運動の推進)(子ども会議によるいじめ防止の全体化) ②YPAアセスメントを複数回実施し、各学級の実態把握をするともに、学年で共有する時間をとり、より多くの目で児童理解を進める。(飯島スタンダードの活用、ユニバーサルデザインな教育環境づくり、チーム学年経営)	・あいさつ運動は児童が主体となる活動とならなかったため年度は具体的な活動を取り入れる。 ・学級の中で友だちのいいところを見つけ合うことを日常化していく取り組みを取り入れ、徐々に異学年同士の交流を深めて全体に広げていく。また、充実した道徳の授業を通して、自分を見つめ、すべての教育活動において道徳的実践力を養う。 ・YPAアセスメントの分析・共有は効果的で児童理解に役立った。また、チーム学年経営で密に情報共有をしたり、教科を分担したことで複数の教員の目で児童の実態や良さをみとることができた。	B
健やかな体	①家庭と連携した食育・保健教育を実施し、児童の意欲を喚起しながら基本的な生活習慣の定着化を図る。(早寝・早起き・朝ごはん)(手洗い・マスク着用・検温・換気) ②生活科・総合における栽培活動や家庭科・給食指導とを関連づけ、地産地消やフードロスを意識した食育の推進を図る。 ③体力・運動能力調査を踏まえた健康の保持増進・体力向上の取り組みをする。	①コロナ禍で基本的な生活習慣については徹底できた。 ②学習の中に栽培活動はあるが、地産地消やフードロスについての学習につなげられていなかった。食育については「ばくばくだより」を利用して行った。 ③体育の授業では、運動量の確保を意識して行った。外遊びの推進については委員会活動で行ったが、通年では難しかった。	B
公共心・社会参画 未来を開く志	①地域交流室(チームひまわり)を中心に教職員や児童(里山委員会)、PTA、学校利用団体等が連携・協力し、学校里山や道具の環境整備を行う。 ②団地祭、どんと焼き、柏尾川で親むい会等の行事共催を通し、学校と地域が協働し「共に地域を創り上げる子」の具現化を図る。 ③飯島小中学校運営協議会の機能化を図り、異校種連携・地域連携を進めることで「持続可能な地域社会の実現」をめざす。	①里山の整備や植物を増やす活動を行い、自然豊かな学校にすることができた。 ②コロナ禍でも、地域行事ができるよう、学校と地域が連携した地域に親む活動を行うことができた。 ③コロナ禍でも、授業公開や児童交流など、できることを行ってきたが、さらに児童生徒が交流を持つ場を設けられるようにしていきたい。	B
いじめへの対応	①自尊感情や有用感(自的・社会的)を高められるように「わかる・できる・共にできる・わかってできる」授業づくりを目指す。 ②豊田地区や飯島中ブロック、保護者等との連携を図り、「あいさつ運動」や「子ども会議」等を促進する。 ③携帯・スマートフォンの安全安心な使い方やネットいじめに関する出前授業を実施する。あわせて、いじめ防止の啓発資料等を保護者に配布し未然防止に努める。	①小さいいじめの認知を多くできているが、継続案件が増えている。全職員で情報共有を丁寧にし、未然防止に努めたい。 ②コロナ依然と同様な連携に展げてきている。 ③今後も、学校でのタブレットの正しい活用の仕方を指導していく。また、いじめに関する情報モラル教育を重点的に、指導していかなければならないと考えている。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①児童支援専任を中心にブロックリーダー3名を指名し、子ども理解のための児童支援体制を図る。 ②「チーム学年経営」を目指し、教科担任制による学年間の情報共有や教材研究を充実させ、チーム力のアップを図る。 ③特別教育支援員、読み聞かせ・図書整備ボランティア、外部講師、地域人材や施設等を積極的に活用し、子どもが安心して生活できる地域連携体制を強める。	①ブロック内での共有をしてブロックリーダーから戻ってくるようにするとよかった。ブロックリーダーが機能しないところがあつた。 ②「チーム学年経営」によって他学級の様子を知ることができ、チーム力をアップさせることができた。 ③昨年度に比べ地域連携体制を強めることができた。	B
特別支援教育	①インクルーシブの視点に立って一般級や個別級の連携強化を図る。(逆交流の活性化・朝の会や休み時間の定期交流) ②国際教室や少人数教室チームティーチングで行い、社会的スキルや基礎的学習面でのスキルアップを図る。(SSTの活用) ③7学年教諭、特別支援教育支援員、学生ボランティアによる個別級の生活・学習サポートを継続的に行う。 ④個々に応じたステップを考えた学習支援とユニバーサルデザインを意識した授業づくりや教育環境の整備に取り組む	①ほぼ全員の個別級児童が朝の会に行き、交流を図ることができた。一般級も個別級も自分の居場所として安心できる環境づくりを進めることができた。 ②限られた機会の中ではあるが、個々の実態に即した支援を行うことができ、文化の違いや学習面で不安を抱える児童も、安心して学習に取り組めるようになった。 ③日々の学習をはじめ、学校行事、校外学習等で7学年教諭、支援員のサポートを必要に応じてつづけることができた。 ④教育環境の整備には努めたが、全ての児童が落ち着いて学習に取り組めるようになるには、更なる教材研究や環境整備が必要である。	B
教育課程・学習指導	①子どもの豊かな体験が基盤となる教育課程(ひまわりカリキュラム)を充実させるとともに、積極的に「地域とかかわり実践化を図る。(地域の教育資源であるヒト・モノ・コトの効果的活用) ②SDGsの視点や豊かなコミュニケーションに沿った単元開発を行い、重点研究の公開授業で検証する。(年6回実施) ③ICT機器の効果的活用(タブレットPC、デジタル教材等)により言語力・文章力を補い、多様な表現伝達方法を身に付ける。	①コロナ禍における活動制限があり、例年以上に充実させることは難しかった。里山での活動は、委員会活動を中心に行うことができた。より活用していく単元開発を行う必要がある。 ②重点研授業を中心に、対話を位置付けた学習を行うことができた。ペアやグループで、対話を通して考えを広げたり深めたりする姿が見られた。 ③ICT機器の活用は進められたが、活用により言語力・文章力をつけることができたかは課題が残る。授業と関連付いた効果的な活用方法を考えていく必要がある。	B
ブロック内評価後の 気付き	○コロナ禍における3年間で協議会の実施回数や地域・小中連携事業、校内行事や公開授業等への委員参観、教職員間の交流等々、過去2年間ではできなかった活動ができるようになってきている。 ・今後は、児童生徒間の交流活動や地域行事における児童生徒の積極的・継続的参加を促進していくことを目指していく。 ○次年度へ向け、豊田地区・飯島町内において「あいさつ運動」を更に促進していく必要性が確認された。 ・小中学校や地域連携により「豊かなコミュニケーション能力」の一つとして重点化していく。 ○学校評価アンケートの回答率が低く、今年度初めて5割を超えた。学校だけでなく学校HP等の充実を図り、教育活動の周知発信を積極的に行うとともに、PTAと連携し教育活動への参加を促していく。		
学校関係者 評価	○学校運営協議会長及びPTA会長より「飯島小中学校運営協議会」の改編案が出され、新年度より会議の方法を工夫したり、回数を増やしたりしていく方向性が確認された。 ○ICT危機の導入により学習・生活スタイルが変容してきている。利便性を求めるだけでなくモラルの遵守や健康被害への注意喚起が必要である。あわせて、見つけさせたい資質・能力の明確化を図っていく。 ○区内小学校において「いじめの認知・解決件数」が多い学校である。積極的に認知することで早期発見・対応することが大切である。本質的な児童指導である授業づくり、人間関係づくりに留意し、楽しい活動を増やしていくことも必要である。		
中期取組 目標 振り返り	○「健やかな体」づくりにおいては、保護者からの学校評価で3年連続、全項目中で最も高い評価を受けている。内容的には感染防止や対応等が中心である。また、休み時間や放課後の校庭使用も使用する時間・曜日・学年等を工夫することで継続的に開放したことが、児童の心身における健康維持につながった。 ○「豊かな心」づくりにおいては、あいさつ運動・やさしさの木・読書推進運動等を児童会活動として全校で取り組むことができ、ある程度の成果をあげることができた。「いじめへの対応」については、次々と生じる事案に事後的な対応を強いられることが多くあった。新年度は、児童支援専任・道徳教育担当教諭・人権教育推進教諭・特別支援コーディネーターの機能強化と運動による体制づくりが必要であると考えている。		

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①日々の学習の中でグループ学習を取り入れ、対話的で協働的な学び合いが実現できるようにする。 ②生活科や総合的な学習の時間などから、地域の財を生かした取り組みを盛り込み、地域人材と交流できる活動を計画する。		
豊かな心	①全ての教育活動において互いの良さを認め合い、違いを尊重しながら問題を解決したり、新しいものを創造したりする体験を積み重ねる。(児童が主体となり地域や中学校と連携したあいさつ運動の推進)(子ども会議によるいじめ防止の全体化)(異学年交流の推進) ②YPAアセスメントを複数回実施し、各学級の実態把握をするともに、学年で共有する時間をとり、より多くの目で児童理解を進める。(飯島スタンダードの活用、ユニバーサルデザインを取り入れた教育環境づくり、チーム学年経営)		
健やかな体	①基本的な生活習慣の定着について家庭との連携を強化する。(気になる児童については面談を利用して伝える) ②生活科や総合で地産地消やフードロスについて学習する時間を確保する。「ばくばくだより」を利用して日々、給食での食育を推進していく。 ③体育の運動量の確保や休み時間の外遊びの推奨をしていく。		
公共心・社会参画 未来を開く志	①地域交流室(チームひまわり)を中心に教職員や児童(里山委員会)、PTA、学校利用団体等が連携・協力し、学校里山の環境整備を行う。 ②団地祭、どんと焼き、柏尾川で親むい会等の行事共催を通し、学校と地域が協働し「共に地域を創り上げる子」の具現化を図る。 ③飯島小中学校運営協議会の機能化を図り、異校種連携・地域連携を進めることで「持続可能な地域社会の実現」をめざす。		
いじめへの対応	①学年や成長に応じた特別支援の授業を、1年生～6年生までの授業の力を活用し、自尊感情や有用感(自的・社会的)を高められるような指導をしていく。 ②豊田地区や飯島中ブロック、保護者等との連携を図り、「あいさつ運動」や「子ども会議」等を促進する。 ③携帯・スマートフォン、タブレットの安全安心な使い方やネットいじめに関する出前授業を実施し、いじめ防止の啓発資料等を保護者に配布し未然防止に努める。		
人材育成・組織運営(働き方)	①児童支援専任を中心にブロックリーダーを3名を指名し、子ども理解のための児童支援体制を図る。年度初めにブロックリーダーの在り方を明確化する。 ②「チーム学年経営」を目指し、教科担任制による学年間の情報共有や教材研究を充実させ、チーム力のアップを図る。 ③特別教育支援員、読み聞かせ・図書整備ボランティア、外部講師、地域人材や施設等を積極的に活用し、子どもが安心して生活できる地域連携体制を強める。		
特別支援教育	①インクルーシブの視点に立って一般級や個別級の連携強化を図る。(個別級理解授業の実施等) ②母語支援ボランティアを活用して言葉の壁をなくす等、児童が安心して学習に取り組めるようにする。 ③全ての児童が落ち着いて学習に取り組めるように、更なるユニバーサルデザインを意識した教材研究や環境整備に取り組む。		
教育課程・学習指導	①豊かな体験を重視した、飯島らしい学び、地域とのかかわりを大切にしたい学びを充実させる。(地域行事との関連) ②学習スタンダードの子どもが落ち着いて学習できる学習環境・職場環境を整える。 ③子どもにとって「分かる」「楽しい」授業を展開し、学びの自己有用感を高められるようにする。		
ブロック内 評価後の 気付き	b9		
学校関係者 評価	b10		
中期取組 目標 振り返り			

重点取組分野	令和 6 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	c1		
豊かな心	c2		
健やかな体	c3		
公共心・社会参画 未来を開く志	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	c6		
特別支援教育	c7		
教育課程・学習指導	c8		
ブロック内 評価後の 気付き	c9		
学校関係者 評価	c10		
中期取組 目標 振り返り			